

好奇心にみち、とらわれることなく、

現実から学ぶことができるように

長畑 正道

一九八九年にベルリンの壁が撤去され、冷戦が
終つて丸六年が経つた。この間、世界の情勢は大
きく変つたが、わが国の変わり方も著しい。自民党

単独政権の終焉という政治の大きな変化があつた
が、経済も激変に見舞われている。バブル崩壊に
よる不況といったことだけではなく、鉄鋼、自動
車、家電といった中心的な産業の拡大はとまり、

明らかに縮小に転じ、そうかといつて今後どの方
向へ転換すべきか明らかでなく、手さぐりの段階
である。

そればかりでなく、私たちの日々の生活の過し
方、そして何よりも幼い子どもをどのように育て
て行くのかという目標について、大きな迷いがみ
られる。

このような問題の解決の糸口を見つけるに当たっては、現在の状況をどう捉えるかが、何よりも重要である。明治維新から現在までの日本の進路は、太平洋戦争という道を間違えた一時期があったものの、徳川時代の封建体制から脱却し、近代社会をつくり上げ、国の富をふやすということであった。今、問われているのは、このような当初の目標を達成して、これからのように進むべきかということである。しかも、もはやお手本となる先進国はなく、われわれ自身が目標を見出し、その実現への道筋を創造して行かなくてはならない。

このようなとき、一番参考になるのは、明治維



新のあと、先人達がどのように日本の近代化の道を創造して行ったかを、ふり返ってみることである。その当時、意外にも、非常に創造性に富んだ多くの人物が登場し、活躍していたことを見出すのである。しかも、政治や経済の領域では、正規の高等教育をうけることなく、むしろ現実を直視し、現実から学ぶということ、そして必要に応じた、社会的に相当の経験を積んだことから、広く世界の知識を学ぶことを忘れたことが注目される。伊藤博文は明治憲法をつくり、そして議会政治をわが国にそれなりに定着させた。高橋是清は独特の経済政策を現実を直視することを通して生み出し、ケインズ学説と基本的に同じ積極財政を昭和の大不況時に実施し、大きな成果を上げた。

文学や科学の領域では、高等教育抜きにしてはできなかったようであるが、余り整備されていない日本の大学で学び、そのあと外国に留学して直

接欧米の文物にふれるということを通して、独創的な業績を上げた何人かの先達がいる。漱石や鷗外の文学作品は、彼ら自身の先に延べたような体験から生まれ、現在でも若い人々にも大きな影響を与えている。御木本幸吉は、本格的な教育を受けたことはなかったが、真珠の養殖という、当時誰も思いつかなかった新しい生物学的業績をあげ、それを企業化するという大事業をなした。漱石とロンドンで一時一緒に暮らしたこともある池田菊苗は、化学者として明治後半から大正にかけて東京帝大教授として活躍したが、独創的な調味料である「味の素」の発明者として知られている。味の素はアミノ酸の一種であるグルタミン酸のナトリウム塩であるが、池田は昆布の煮汁を分析することによって発見した。

このように見てくると、優れた政治・経済の実践や、文学や科学上の独創的な業績を生み出すには、現実を直視し、自ら考え抜き、既存の知識に

ふりまわされないことが、何よりも重要であるようである。過去の知識や技術を学び過ぎ、それに捉われると大きく道をあやまってしまふ。昭和初期の指導的な軍人や官僚は、それぞれの養成機関で優秀な成績を収めた人物ばかりであったが、結局日本を太平洋戦争へと導いてしまった。

戦後五十年目の日本の現在の行きづまりを打開するには、すでにモデルのある物づくりではなく、世界中から待ち望まれるような新しい、価値のある情報を生み出し、発信できるようにすることのほか、なさそうである。

このように見てくると、これからの幼児教育は、既存の知識や技能をつめ込むいわゆる早期教育ではなく、頭や身体を使うさまざまな活動を子どもに体験させつつ、現実を直視させ、そして子どもがもつみずみずしい好奇心をいつまでも保ち続けさせることにあると思われるのである。

(文教大学教育学部)